

照葉樹林文化論と中国西南民族研究⁽¹⁾

— 日中比較的視点から

劉 剛⁽²⁾

照葉樹林文化論は中国西南部及び東南アジアの少数民族研究における理論の一つである。もともとは日本の研究者が提唱し、徐々に体系化してきたもので、現在も主に日本国内外で流通している。内容としては、生態学、農耕の起源と発展、生産、生活習俗と文化伝播などのテーマを包括している。これについて、筆者は以下のように認識している。照葉樹林文化論の理論的フレームは、比較的大きな区域についての包括的な文化論としてはユニークで新しく、中国の西南民族研究にとってもこれを参考にすることは積極的な意義があるし、われわれの研究領域を広げ、深めるのに役立つだろう。しかしながらこの理論にも一面的で不十分な面があるのであり、これに対しては慎重な態度をとらなければならない。

日本の学術界で近年特に流行している「照葉樹林文化論」は、中国の西南部と東南アジアの少数民族研究における国外での重要な理論の一つである。この理論は生態学理論と結びついて現れてきた。戦後、民族学や民俗学が蓄積してきた調査資料に基づいて、日本の植物学者である中尾佐助が今世紀六十年代にヒマラヤ山麓を調査したとき、ヒマラヤ山脈中部の高度1500～2000メートル地帯の東部から、アッサム、雲貴高原、江南、そして朝鮮半島南部と日本列島の西南部にかけての広大な地域に「照葉樹林」(Lucidophylus forest) が分布していることに気づき、はじめて「照葉樹林帯」の問題を提起したのである。同氏はさらに進んでこれを農耕起源の問題と結びつけて考察しようとした。

植物学の観点から言えば、東南アジア東部(つまり中国東部)の植生区域は淮河を境として北の落葉広葉樹林帯と南の常緑広葉樹林帯にはっきりと分か

れている。北の落葉広葉樹林帯の樹木はコナラ属(Quercus)のもので、代表的な樹木としてはカバ(Belula)、シイ(Tilia)、ニレ(Ulannus)などがあり、「ナラ林帯」であると言える。一方南の常緑広葉樹林帯はカシ(Cyclobalamopsis)、クリカシ(Castamopsis)、シイ(Pasamia)、タブ(Machilus)、クス(Cipnamonus)などからなり、おなじみのツバキを含めて多くの樹木がこれに属する。これらの樹木は葉の表面が光っているので「照葉樹」と呼ばれ、その森林地区を「照葉樹林帯」と言う。この照葉樹林帯の中に共通した文化的要素がきわめて多く分布していることを発見したことから、中尾は照葉樹林帯の「文化」を問題としてはじめて意識し、その著『栽培植物と農耕の起源』(1966)のなかで以下のように指摘した。「東南アジアの熱帯降雨林地帯の北方、主に大陸のインドシナ半島の脊柱の山脈の上から北方にむかって、温帯性の森林地帯がある。この温帯林は常緑性のカシ類を主力とした森林で、日本でいえば、クス、シイ、イヌグスなどのような、濃緑色の光った葉を持つ密生した森林となる。この森林は東アジア独特なもので照葉樹林(Lucidophylus forest) と呼ばれ、東アジアでは熱帯降雨林につづく大きな生態的環境である。この照葉樹林はさらに高地、あるいは北方では針葉樹林(ヒマラヤ地域)、サバンナ地帯(シナの原始的景観)、落葉樹林(朝鮮、日本)に接する。」

中尾によれば、人類の農耕文化はまず東南アジア熱帯雨林の生態環境の中から発生した。そこには人類が飢えと寒さを解決するために利用できる物産が豊富にあった。バナナ、イモ類植物、野生のキビなどである。人類が照葉樹林帯に踏み込んだとき、熱帯作物も北限に達したので、人々はこの環境の変化に適応した農耕文化を生み出すことになった。人々

が選んだ作物はヤマイモやサトウキビなどである。このようにして広大な照葉樹林帯の中に文化的な複合一つまり照葉樹林農耕文化要素の基本的複合がおこった。また、現実の民族文化を見ると、ちょうど熱帯作物を苦心して改造したのと同じような文化現象は農耕以外の文化要素にも観察される。よって中尾は当初これを「照葉樹林文化」と名づけたのだった。

佐々木は1960年の前半にネパールで調査を行い、そのちインドのアッサム、ブータン、東南アジア各地および台湾にも足をのばした。1979年以後、彼らはようやく相次いで中国の西南地区を訪問し、これ以来、東はヒマラヤから西は日本西南部におよぶ照葉樹林文化研究が比較的具体的な実地調査の基礎の上に展開することが可能になった。そして同時に少しずつ資料を蓄積し、理論を組み立てていったのである。

この間、『続・照葉樹林文化』（1976）、『照葉樹林文化の道—ブータン・雲南から日本へ—』（1982）、『雲南の照葉樹のもとで』（1984）などの著作が相次いで世に問われ、照葉樹林文化論はじょじょに系統化、理論化されていった。

照葉樹林文化論は基本的な内容と特色は、以下の数点である。

（1）焼き畑農耕を基礎とする雑穀栽培とイモ類栽培の農業が、真っ先に「照葉樹林文化帯」の中心である雲南地区に登場した。

（2）この地域には現在に至るまで以下のような共通の文化要素が存在している。水さらしによってワラビ・クズなどの植物を処理し、渋みと毒素を取り除いてデンプンを取り出す方法、茶の栽培と飲用、絹織物やウルシ製品の製作、麴（コウジ）を使った酒の醸造、米で発酵させるナレズシ類、発酵大豆製品の食用、モチ製品を嗜好する慣行、食用イモ類やヤマイモ・アワ・ヒエ・シコクビエ・コーリヤン・オカボなどの雑穀栽培、鵜飼いによる漁法など。

（3）この地域に広く伝わっている神話や伝説、礼儀習俗、祭儀規則などには類似したものが多く、歴史上相互に深い関係があったことを物語っている。

文化複合と時空間の関連性から見ると、照葉樹林

帯の文化発展史は以下の三段階に集約することができる。

1. 原発農耕段階——採集、狩猟、漁猟、選択された植物の半栽培。
2. 焼き畑農耕段階——雑穀、根菜作物の栽培。
3. 水稻農耕段階——水稻農耕の発展と成熟。

照葉樹林文化論の提唱者は、実地調査にもとづいて「東亜半月弧」の仮説を提起し、アッサムから雲南、貴州にかけての地域を照葉樹林文化の中心地帯であると考えた。またこの地域は照葉樹林文化に共通する文化要素が特に集中しており、照葉樹林文化の起源は中国雲南であるとさえ言うことができるとした。また日本文化の起源の問題に引き寄せて言うと、照葉樹林文化のいくつかの発展段階を時間的に正確に把握することは難しいものの、「稲作文化が日本に伝わる前の縄文時代末期、あるいは弥生時代初期に照葉樹林焼き畑農耕文化がすでに日本に伝わっており、日本の基礎的文化の形成にかつて強烈な作用を及ぼした。したがってこれこそ日本の最も古い基層文化であり、また稲作文化の母胎文化となったのである。」

その伝播経路については、揚子江下流一帯を通過して東漸した可能性が高いとされる。そればかりでなく、稲作農耕などの文化要素は揚子江下流を伝播していく過程ではぐくまれ、蓄積され、ほどなく江淮地帯を通過し、長江下流から朝鮮半島南部を経て北九州に入り、西日本一帯に広がっていった。

学術思想の流れから見ると、照葉樹林文化論は十九世紀以来の進化主義的人類学の社会発展段階論の影響を受けており、とりわけ20世紀はじめに唱えられた伝播主義人類学理論の色彩が強い。この理論に見られる「外因論」「文化要素伝播論」「移動論」「文化圏」「文化層」などの概念が照葉樹林文化論の誕生と発展に強く影響している。

伝播理論をひろめたグレーブナーは、ある文化が平面的に伝播、あるいは分布拡散したあと、さらに新しい文化が同じような分布で伝播し、もとの分布図に重なるはずだと考えている。つまり、一つの文化圏内には積み重ねられた層—文化層があるはずである。したがって彼は、民族学は歴史学の一系で

あり、その目的は文化層の層所は究明することにあると考えていた。グレープナーが完成させた文化圏説の方法論の中に、各種文化要素とその分布の確定、各種文化複合体の観察と類型化、それに基づく各種文化複合体相互間の間的前後関係（層序）の推論といった方法を見出すことができる。照葉樹林文化論がかなりな程度その影響を受けていることは疑いない。そればかりか日本の民族学研究的全体が、ある程度においていまだに伝播主義理論の域を出ていないと言える。

日本民族学研究的歴史は必ずしも長くない。1934年に日本民族学会が成立し、民族学研究に着手してから現在まで約50年あまりである。これ以前は日本の民族学研究は国内に集中し、民俗学と称して主に郷土研究に力を入れ、日本古代文化の探求と解明に尽力し、大きな成果を収めていた。1934年に日本民族学会が成立してからそれまでの研究の蓄積を比較・総合し、「それらの相互の系統・所属関係を研究し、文化の発生から拡散にいたる伝播の理論と方法を探索し、このために海外の民族学研究的発展を強化する」⁹⁾ ことになった。第二次世界大戦後、日本は天皇制国家制度の生産と発展に対して深刻に反省し、この時代の雰囲気の中で日本学術界は日本民族の由来と文化の発生、発展について真剣に考察した。その結果、日本民族文化の起源地は日本本土ではなく、異なる時期に異なる道筋を経由して日本に伝わったものが何度も複合して成立したという認識に達した。こうして民族学の実地調査を通して日本民族文化の発源地を探求することが日本民族学・人類学などの各学科にとって長らく問題となってきたのである。

したがって日本民族学研究が依拠するにふさわしい理論を必要としていたとき、当の伝播主義はすでに斜陽になっていたのだが、日本に生き延びる場所を見つけたというわけなのである。このような歴史的環境のなかで、今世紀半ばに活躍した日本の著名な民族学者たち、——岡正雄、白鳥芳郎、馬淵東一、宇野園空、松本信広、石田英一郎、佐々木高明などは多かれ少なかれウィーン学派の影響を受け、ある者は実際ウィーン大学民族学科に留学したのだった。したがって照葉樹林文化論はまさにこのような背景

のもとに生まれたのである。

客観的に言って、伝播主義人類学が打ち立てた壮大な文化圏モデルは結局のところ実情に合わないのだが、文化の伝播という観点から文化的変遷を重視したこと、とりわけ地域社会において実証的に民間間の文化移動を研究したことはそれなりに意義がある。実証研究を基礎として大量の民族文化要素を把握すれば、その推論と仮説の説得力を高めることができるのである。アメリカの人類学者ボアズとその学生（マーガレット・ミード、ルース・ベネディクトなど）たちは、まさにこのような研究の積み重ねを行ったのである。佐々木高明の照葉樹林文化論の研究もまた、このような試みの継続なのである。

いうまでもなく照葉樹林文化研究の領域は非常に広く、民族学、民俗学、考古学、文化人類学、飲食人類学、農学、作物学、植物学、宗教学、神話学、語源学、地理学などの研究者が均しく参加している。佐々木自身、地理学の出身である。多くの学科、多くの研究者が参加することで、世界の学術の多くの理論流派と学説が、照葉樹林文化研究の中に影響しており、このことも照葉樹林文化研究の学術思想を活発にしている。

二

中国の西南地域は世界的な人類発祥の地の一つであり、新石器時代から多民族が交流してきた重要な地域である。言語から見ると、古代から現代に到るまで四大語族——チベット・ビルマ語族、チワン・トン語族、ミャオ・ヤオ語族、モン・クメール語族——がここで生活してきた。それらは古くから周辺地区の民族と密接な関係を持っている。チベット・ビルマ語族に属する各民族は北方の民族集団や漢民族と歴史的な関係が深い。チワン・トン語族とモン・クメール語族の各民族は東南アジア各国の民族と歴史的な関係があつて、それらと親縁関係にある主要な民族がその外側に分布している。ミャオ・ヤオ語族の各民族の移動はさらに頻繁であり、分布地域の広い民族集団である。このような状況のため、西南民族研究は必然的に外向的、開放的な系統をなすことが決定づけられている。このような意義から言っ

て、照葉樹林文化論とわれわれの研究は期せずして同じ道を行くことになる。つまりすべて東アジア地区南部の民族と文化の発生・発展の解明、各地域の人々の文化上の共同性と差異の解明を目的とするのであり、以下、西南民族研究と結びつけて照葉樹林文化理論の長所短所と意義をさらに論述してみよう。

1. 照葉樹林文化論は生態学をその背景にもつ点で突出した理論的特色を持っている。

中国の西南部は多民族地域であり、各類型の民族が雑居し、かつ立体的な分布をなしている。このため、各民族間の生態類型の差異ははっきりしている。しかしかつて50年代に民族調査が開始されたとき、われわれは各民族の社会発展研究において一方では彼らの社会を原始社会の「生きた化石」と見なし、また一方でモルガン理論にもとづき、古典進化主義の「普遍進化」あるいは「単線進化」モデルで十把一絡げに論じてしまった。そして雲南が「植物王国」「動物王国」であることの内在的含意を見落とし、民族形成が社会と自然の総合的な過程であるという法則を無視してしまった。このためモルガンの『古代社会』を金科玉条とし、30年ものあいだ敢えてそこから踏み出そうとせず、このモデルをマルクス主義理論の具体化であると思込み、中国の民族調査研究を長期にわたって閉鎖的な停滞した状況に置いた^⑧。このため国外の研究者がわれわれの成果を利用しようとするときも半信半疑で二の足を踏んでいるのである^⑨。

実際のところ、マルクス本人は古代社会の発展にはいくつもの形態があり、地理的な要素と密接に関係していることを繰り返し認めている。彼はかつて「ある部族は地理的に隔絶し、彼ら自身で異なる発展段階を経験する。また別な部落は外部の影響を受ける。」と述べた。こうした卓見は今後の人類学的実践によって証明されることになるだろう。

雲南の民族社会の発展にはこのような例が多く見出される。ペー族、ダイ族など、雲南の盆地に住む民族においてはその特殊な環境と地理的位置によって、社会発展の過程で水利灌漑事業が家族共同体から農村共同体と国家の起源ひいてはその形成に重要

な作用を及ぼしている。しかし山の中部から高地にかけて居住する民族にはこの要素の作用はほぼ見られない。同じように地理環境の影響によって、ダイ族の社会内部においても国家形式の上で大きな分化が見られる。

2. 建国以来、西南少数民族の歴史と文化を研究する過程で、民族学はその文化的特徴の研究を重視してきた。しかし一般的に言って、文化的特徴あるいは文化要素の研究はたまたま発見収集されたものを単に描写するレベルにとどまっており、詳細な分類と正確な分析はまだ行われていない。つまり民族学調査研究において、定性定量分析が適用されていないのである。

照葉樹林文化論は民族と文化の発展と変化を研究するため、共通の文化要素を収集し分析する方法を採用した点で大きな意義をもっている。

広範にわたる文化考察にもとづいて水さらしによるアク抜き技法、茶の飲用、絹織物、漆製品、梗餅米（ジャポニカ種のモチ米）、コウジ酒、柑橘類、シソ、発酵食品（納豆など）、モチ製品などを共通の文化要素として取り上げ、これらの要素を科学的な仮説として各地域の実地調査の中で検証したのである。

たとえば、水さらしについては調査の結果西南の山地民族（ミャオ・ヤオ・ジンポー・ハニなど）と日本の山村にすべて存在していることが証明された。茶の栽培と飲用については、雲南と日本およびその中間地帯に長い歴史があることが分かった。雲南のドアン族⁽³⁾の茶の木はすでに1000年を経過しており、共通の茶の栽培と飲用は、この地域の一つの文化的特色を構成している。

養蚕と絹織物についてはどうだろうか。絹織物は蚕の繭から出てくる糸で作られる。中国南方と日本で飼われている蚕は同じボンビックス・モリ（*Bombix mori*）で、しかもこの地域に多くの野生種と自然放養されたものが生息している。ボンビックス・モリ（*Bombix mori*）はおそらくその中から選択されたのであろう。

また、コウジを用いる醸造法は、ヒマラヤ山麓か

ら東南アジア西部、中国西南部、華南から日本に到る照葉樹林帯にのみ存在する。雑穀、根栽型作物という共通文化要素は、照葉樹林地帯のどこにも見られる。焼き畑農耕を基礎として、人々は山地にアワ、コウリヤン、オカボ、ハトムギ、イモ類などの作物を植えた。イ、ミャオ、ヤオなどの民族は山にジャガイモ、ソバ、燕麦などの雑穀を植えている。その中でも鳳尾と呼ばれるシソ類はミャオなどの民族が火入れをしたあと最初に植える作物で、そのあとにソバなどを播く。雲南南部の諸山地民族であるジンポー、ハニ、ヤオ、アチャンなどにおいては、根栽作物は普遍的である。

照葉樹林地帯にはもうひとつ文化的に共通な特色としてモチ米の食用が挙げられる。モチイネはその澱粉分子のウルチ澱粉とモチ澱粉の比率が異なるために粘性が強い。しかしこの粘性の強いモチ米を好んで食用とするかどうかは文化的な選択の問題である。照葉樹林帯の外側、たとえばインドには同じように粘性の稲があるが人々はまったく食べようとしない。照葉樹林帯では日常生活の中で好まれるばかりでなく、主な祝祭日においても重要視されているのである。

このほか発酵大豆、ナレズシ、鶏飼いなども共通の文化要素として照葉樹林文化地域に広く分布している。

精神文化方面では多くの習俗、礼儀、神話伝説などの多くが共通の文化要素となっている。たとえば歌がき、作物神話、裁判法などである。以上、これらの文化特色を備えた要素は、過去数十年の民族調査において、中国の民族学研究者にも見慣れたものであるが、いまだより広い視野から把握されたことはなかった。共通の文化要素を確定、収集し、これを整理分類し、現代科学技術を応用して適切に処理していくことは今後の中国の民族学が発展して行くべき一つの方向であると思われる。このような点から言って「野の民族学」(フィールドワーク)は重要な意義をもつのである^{(4)⑥}。

3. 照葉樹林文化論は植物生態学に基づいて作物学と民族学を総合的に論ずる立場をとっており、そ

の仮説としての共通の文化要素をあつかう学科は非常に広範にわたっているので、その研究方法も実際の調査地で自然科学的な観察法と社会科学的な調査法を併用するものになっている。このため自然科学と社会科学分野の多彩な専門家が狭い見識を打ち捨て、書齋を出て協力し合いながら実証研究を行い、それぞれの視角からその理論の科学性を検証している。

たとえば稲作起源の問題を語る時、かつては研究者自身の限られた範囲の中で、ある者はインド東部起源を唱え、ある者は長江中流域をそれと見なすという具合で確証を欠いていた。「実際、考古学と作物学の研究はしばしば食い違っていた。考古学はもっぱら発見に頼っていて、しかもそれは偶然性によっていた。だから私(佐々木)は稲作起源の問題は作物学の観点から調査した方がよいと判断した。⑦」農学者は、稲作はアッサムから雲南一帯に発生したと考えていた。それは栽培品種の変化と稲そのものの遺伝の親合性の研究から導き出された結論によっており、雲南には古い品種の多くが最も目立って集中していたのだ。1982年、佐々木は調査団を率いて雲南を訪れ、西双版納のハニ族(アイニ支系)の農村で、水田でも畑地でも栽培可能だが、いまだ水稻にも陸稲にも分化しておらず、その品質もインディカやジャポニカでもない中間的な特性を持った原始的な品種を発見した。このほか西双版納では多くの野生種、栽培種の稲が発見され、それぞれに大きな変異が見られた。したがって最も原始的な稲は水稻でも陸稲でもなく、中間的な性質を持っていて、湿地、旱地、高地、低地、低窪地のどこにでも分布するものと考えられた。この原則に基づくならば、西双版納も稲作が発生した一地域と考えることができる⑧。このように実地調査の方法を通して照葉樹林文化論の内容は豊かになっていった。

照葉樹林文化論は比較的大きな地域の総合的文化論としては理論的フレームと特色に類を見ない新しさがある。ただしまさにそのために、この理論は各方面、各学科からの検証と推敲を受ける必要がある。この数十年来、日本国内でも数人の研究者が照葉樹林文化論に対して疑問を投げかけている⑨。各方面

の資料の分析、研究を総合すると、学術意義上の照葉樹林文化論としては、なおさらに検討を進めるべき問題がいくつかあると筆者は認識している。

まず、照葉樹林文化論は文化伝播論の立場に立ち、生態学、植物栽培学及び農学の視角から照葉樹林帯の民族の歴史と文化の総体を調査しようとするものであり、主に現在の民族学、民族誌資料を利用しながら実地調査と理論の分析を通して整理し、ここから理論モデルを引き出しており、理論研究の角度からいって積極的な意義をもっていることは間違いない。しかしその一方で文化活動は人の活動と一体であることを考えると、人類活動を記録している考古学資料と文献史誌資料は間違いなく客観的かつ忠実に歴史上の人類集団の活動を反映している。したがって照葉樹林文化研究は、中国華南、西南及び長江以北の歴史上の民族活動の研究を決して無視してはならない。いいかえれば民族誌研究の成果と結合させてこそ照葉樹林文化の伝播経路が明らかになるのである。思想と歴史過程を一致させることができるのである。

稲作の起源と伝播の問題に関して、考古学上の発見から論証を行うことは、確かに偶然性によるところが大きい。しかし現在考古学の材料の蓄積は相当な程度に達しており、その偶然性は影をひそめ、蓋率性が見出されるようになってきている。ある人が考古資料に基づいて栽培稲の伝播について統計をとったところ、中国では年代から見て杭州湾（7000年前）を中心として東から西へ環状に拡散している（東から西へ6000年前、5000年前、4000年前、そして雲南が3000年前）ことが分かった⁹。稲作がどのように雑穀根栽型の文化の中から現れてきたのか、またその変化の時間と過程がどのようなものであったかについて、照葉樹林文化論はこのようにもっと具体的な説明をくわえるべきなのである。

次に、東アジア大陸の南部は昔から民族構成がきわめて複雑でありその移動も非常に頻繁であった。それでは照葉樹林文化の民族的担い手は一体どのような民族であり、彼らは今日現存する各民族とどのような関係を持っているのだろうか。これも研究すべき問題であり、したがって照葉樹林文化理論は形

質人類学の研究も重視すべきである。これによって照葉樹林文化の伝播者を知ることができるはずなのである。現在のところ、考古学と形質人類学の資料によれば中国大陸の南部に歴史時代以前に存在していた人類種族はおそらく今日のモンゴロイドの南方支系ばかりでなく、オーストラロイドもここで活動していたらしいということである。したがって、照葉樹林帯の形質人類学と古人類学²の研究が協力して太平洋周辺と比較研究を行うことが必要である。

第三に照葉樹林の内容そのものについてもいくつかはつきりさせるべき問題がある。まず、照葉樹林文化の段階論の中で、「稲作文化」の発生はその第三段階とされているが、同時にその理論著述では、「稲作文化」と「照葉樹林文化」はあい対する二つの概念として用いられている。実際のところ、照葉樹林文化理論は「山地文化」と「平地文化」の関係を述べるときにいまだ突破できない問題を抱えていて、それがここに反映されているのである。つまり焼き畑雑穀農業がどのような要因によって、どのような条件下で稲作農耕への変化をとげたのか、「自然生態文化」がいかに「人口栽培文化」へ移っていったのか、という問題である。

また、文化史の角度から見ても、作物の起源は必ずしも農耕文化の起源とは一致しない。ある土地のある作物品種がその土地では発達しないのに、なんらかの人文的要因によって別の土地に移ってはじめに発達し始めるということがある。このような事例は世界文化史上珍しくない。したがって照葉樹林文化起源説は生態学と作物学のみを基礎とするレベルにとどまるべきではない。

さらに文化複合の解明についていうと、共通の文化要素は確定は一体どのような原則に基づいているのだろうか。共通の文化要素のそれぞれは現地文化の中でどのような地位を占め、別の共通文化要素とどのように関連しているのか。ある種の文化を論じるときいくつかの部分にのみ注意して他の問題を見逃すならば、総合科学的な結論を出すことは難しいだろう。たとえば共通の文化要素としての歌がきは照葉樹林帯ばかりではなくオセアニアにもある。したがって文化要素の複合体としては、なお具体的

にその内容を探求し、それがどれくらいの程度において複合しているのか。相互にどれくらいの関係があるのか。内包的・外延的なつながりは全体的な複合なのかそれとも部分的なものなのか、これらの要素が文化の総体の構造と機能においてどのような作用を及ぼしているのか、といった問題を明らかにすべきであろう。

第四に、照葉樹林文化論は地域文化研究の理論の一つとしては明らかに価値のある実証研究となっている。その理論的傾向は文化の「伝播」にあり、その理論的な核は「文化圏」の定義として表現されている。研究が深まるにつれて、中日双方の学術協力を強化し、西南民族文化に対して調査研究を行うことが重要となってくるだろう。同時に西南民族文化を多角的な視野の中において西南部とその周辺地域、中国北部地域、江南地域とオセアニアの東部の歴史文化関係を調査することも必要となるだろう。

【訳者注】

- (1) これは中国の学術雑誌『思想戦線』1989年第六期に掲載された論文を日本語に訳したものである。当時学術界のみならず一般的にも大きな話題となっていた照葉樹林文化論について、中国の民族研究者の視点からの批判と展望をまとめたユニークなものであり、時間差はあるが、そのまま翻訳して紹介することになった。
- (2) 雲南民族学院、教授。現沖縄大学教授。
- (3) 原語はパラウン族。現在ではドアン族と呼び習わしている。
- (4) 原語は「野人人類学」。著者によればこれは佐々木高明氏との個人的な会話において使われた比喩であり、研究室にとじこもらずに野に出て行う人類学、つまりフィールドワークのことをさす。ここでは誤解を招きやすい「野人」という言葉を避けて意識した。
- (5) 古人類学。

【原註】

- ①中根千枝、「日本民族学会五十年の歩み」。
- ②喬健、「从西方人類学的演變說到中国學術的發展」『雲南社会科学』：童恩正「摩尔根模式与中国的原始社会史研究」『中国社会科学』1988年第三期。
- ③小野澤正喜、「馬克思主義与人類学」(劉剛訳)『民族研究訳*』第11期
- ④馬曜、「西双版纳泰族水稻栽培灌溉事業在家族公社向農村公社過渡国家起源中的作用」。
- ⑤劉剛、「『東南亞世界的形成』一書評介」『雲南民族学院学報』1988年第二期。
- ⑥野人人類学とは、日本の民族学者佐々木高明が使った比喩である。
- ⑦佐々木高明、「从稻作看苗、瑶文化」『西南民族研究動態』第二十期。
- ⑧同上。
- ⑨石井博、「照葉樹林文化」『民族学研究』(日本)四十九卷3号。
- ⑩吳維堂、「中国稻作農業的起源和伝播」『地理学報』第四十卷第一期、1985。

参考文献

- 中尾佐助、『栽培植物と農耕の起源』、岩波新書、1966。
- 上山春平、佐々木高明、中尾佐助、『続・照葉樹林文化』、中公新書、1976。
- 佐々木高明、『照葉樹林文化の道—ブータン・雲南から日本へ—』、NHKブックス、1982。渡部忠世、『稲の道』NHKブックス、1982。
- 渡部忠世、桜井由躬雄、『中国江南の稲作文化：その学際的研究』、日本放送出版協会、1982。
- 佐々木高明、『日本農耕文化の源流—日本文化の原郷』、日本放送出版協会、1983。
- 佐々木高明、『雲南の照葉樹のもとで』、日本放送出版協会、1984。(長谷千代子訳、九州大学文学研究科博士課程)